

# 時代の架け橋

登録文化財

綾部大橋の76年

③



西村さんにとって「綾部橋」はかけがえのない存在になっている（味方町で）

今は「綾部大橋」の名で市民に親しまれているが、味方町の西村勝美さん（84）にとつては「綾部橋」の方が馴染み深い。現在の橋が建設されたのは西村さんが小学生のころ。当時低学年だった西村さんは、現在地より6ヶ所下流に架かってい

た木造の綾部橋を通って綾部尋常高等小学校へ通学していた。途中、橋の上に足を止めては新しい鋼鉄製の橋が造られていく過程を見守り続けた。

「木造橋よりもうんと高く、見上げながら通学した。『すこい橋ができるな』と子ども心ながら驚いた」。橋脚の建

## 昭和の時代を共に歩んだ「綾部橋」

ようと完成当時は茶色。青色になったのはずっとあとだという。

西村さんは毎日、綾部橋を通って小学校と福知山商業学校に通学。卒業後は大蔵省に勤めるが、

こうして昭和4年6月8日、橋が完成。「明日校へ行ける」と喜んだ西村さんは、味方町から並松町へ走って橋を渡った。まだコンクリートが乾ききっていないなかった路

設では、潜水服を着た人たちの姿が「火星人のよう」で異様な感じにもとれど、「と、西村さんに強烈な印象を与えた。

橋はどんどん形を変え、特徴的なボーストリング・トラスの形も姿を見せる。現在の橋は青色だが、西村さんの記憶には、夏になると橋上から

数ヶ所下の由良川に飛び込んで、橋脚と橋脚の間を潜って泳いだりする絶好の遊び場にもなった。面には、西村さんの足跡も刻み込まれた。それからというもの、どもたちにとって綾部橋は、夏になると橋上から

数ヶ所下の由良川に飛び込んで、橋脚と橋脚の間を潜って泳いだりする絶好の遊び場にもなった。面には、西村さんの足跡も刻み込まれた。それからというもの、どもたちにとって綾部橋は、夏になると橋上から

橋が健在だったので、思い切って対岸の自宅を確認した。無事だと分かると思わず涙が出た」と感慨深げに語る。

橋が健在だったので、思い切って対岸の自宅を確認した。無事だと分かると思わず涙が出た」と感慨深げに語る。

西村さんは、丹波橋などが建設されるまで市街地と国道27号を結ぶ橋として重要な役割を果たす。「綾部橋は昭和の時代を立派に生き抜いた」。西村さんは、人生を共に歩んだ

のではと恐ろしくなったかけがえのない存在だ。（岡田圭司記者）